



横田之子が描いた中国風景 —近代日本美術の図版発掘 (4) —

彭 国躍

(非文字資料研究センター 研究員)

1. はじめに

横田之子(1909～1945年)の存在は近代日本美術史ではすっかり忘れられている。彼女の活動期間が短く作品情報がほとんど残っていないのがその一因だったかもしれない。二十世紀前半頃、女性の社会活動の場が厳しく制限され、女流洋画家は人数が少なく、ほとんど流れ星のように無名のうちに現れては消えていた。彼女たちの作品は原画、図版ともに歴史の闇に埋もれたケースが多い。横田之子もそのうちの一人であった。それだけに、彼女の足跡は近代日本美術における女性作家の活動を知る貴重な史料となろう。

2. 横田之子と中国

2.1 上海在住の経緯について

筆者は2024年3月に横田之子が1942年の第29回二科展に出品した作品「楊樹浦」の絵はがき図版を収集してから彼女のプロフィールについて文献調査を始めたが、その後その親族の方と連絡が取れ、5月18日に訪問取材を実施した。ここで文献調査と訪問取材で得られた情報をまとめる。

まず文献調査により次の(1)～(3)の関連事実が浮かび上がった。

(1)『横須賀美術館年報・平成26年度版』(2015 p. 63)によれば、横須賀美術館が2014年に朝井閑右衛門(1901～1983年)の絵画「逝ける横田之子女史」(1945年作、油彩・画布、45.5×37.9 cm)の寄贈を受けた。これにより朝井閑右衛門と横田之子とのかかわりが見えた。寄贈作品(図1参照)の落款には「昭和二十年三月二十六日 薄暮聖歌聴裡 合掌寫圖 之子女史愛毫用」と見られる文字が書かれているので、彼女は終戦5カ月前に亡くなったこと、そして朝井が彼女愛用の絵筆を使い聖歌を聞きつつ写生していたことが明らかになった。



図1 「逝ける横田之子女史」朝井閑右衛門作、1945年、横須賀美術館蔵

(2) 1943年刊行の『上海の文化』(上海市政研究会編、華中鉄道刊)には、「朝井閑右衛門氏も最初は従軍畫家として來滬したが江南の風物に強く愛着を感じ、其の後二回當地に滞在し、上海畫廊で同氏にとっては生まれて初めての個展を開催した」(p. 241)という記述があり、そして『没後40年朝井閑右衛門展』(横須賀美術館、2023)掲載の「朝井閑右衛門年譜」(工藤香澄編)の1945年3月の記載には「疎開した妻子と離れて単身上海におもむき、横田東一宅にしばらく居候の後、ブロードウェイマンション714号室に住む」(下線は筆者による。以下同)と書かれている。これらの断片的な情報により朝井閑右衛門と横田東一の接点、そして横田東一と横田之子の関係が浮上した。

(3) 横田東一に関する資料調査により、彼は1945年終戦まで二十年近く上海に在住し北四川路(現・四川北路)に歯科診療所を開業していたこと、上海の(日系私立)東亜同文書院の校医を務めていたこと、上海在住の日本人キリスト教関係者名簿に名をつらねていたこと、そして戦後引き揚げた後に銀座で「横田歯科診療所」を開設したことなどの事実が判明した。

以上の資料調査で得られた情報を踏まえた上で、現在銀座の「横田歯科診療所」を通して、横田東一の令息横田東平氏に連絡することができ、2024年5月18日に横田宅への訪問取材を実施した。当日の取材とその後の

電話連絡、確認により、横田之子について、次の(4)～(8)の新しい情報が得られた。

(4) 横田之子は横田東一の妻であり、旧姓は「森」で、実家は岡山県にあった。結婚前に描いたと思われる教会のある風景画の写真には「YUKIKO MORI」のサインが入っていることも確認された。

(5) 横田之子は日本で女学校を出ているようだが、洋画を学んだ経緯については不明である。

(6) 横田東一は1920年代頃一時期京城(韓国ソウルの旧称)の「大陸資源科学研究所」にいたが、その頃森之子も京城にいらしく、二人とも敬虔なキリスト教信者で、京城での伝道活動の中で出会ったらしい。

(7) 横田之子は1945年3月26日に上海で終戦前の混乱の中、人助けのために何かを説明しに行く途中交通事故に遭い、5人の幼い子供を残して36歳の若さで亡くなった(写真参照)。

(8) 5人の子供のうち一番上の長女が1933年に上海で生れたそうなので、横田之子は少なくとも亡くなるまでの12年間は上海に在住していた。



写真 生前の横田之子(横田東平氏提供)

2.2 上海での美術活動について

横田之子が上海在住の日本人画家として活動していたことについて、前掲の『上海の文化』(1943)では次のように記録されている。

「女流畫家では新制作派出品の村尾絢子氏^④が十五年から上海に在留し、個展を開催、又横田之子氏は古くより當地に在って二科に出品し現地女性への美意識敷衍に努めている。」(p. 241)

「昭和十七年暮山本隼秀氏が新美術團體結成の提案を建議したのをきっかけとして上海美術家聯盟、玄黄社、彩虹会の代表者及び伊藤研之^②、辻谷勝三^③、村尾絢子、横田之子の四氏が數度會合して文字通り全上海の畫家が一丸となって決戦下の美術報國に挺身する團體を結成すべく意見を交換した結果、現地唯一の翼賛團體たる上海總力報國會の外郭團體として上海美術報國會を結成することに一致し、前記各團體の會員及中央畫壇への出品者

等を洩れなく網羅し會員七十二名を以て昭和十八年二月十一日結成式を舉行した。然し長谷川三雄^⑤氏は意見の一致を見ないところがあつて入會しなかつた。」(pp. 242～243)

この二カ所の記述から、横田之子は1943(昭和18)年より以前から長期的に上海に在住し、その間に上海から二科展に出品し、上海日本人美術団体の中で中心人物の一人として活躍していたことが分かり、そして、1942(昭和17)年末頃には上海在住日本人の美術団体として「上海美術家連盟」「玄黄社」と「彩虹会」があったことや、1943(昭和18)年に戦時翼賛体制下の政治団体「上海總力報國會」が各種美術団体を統合し官民一体の「上海美術報國會」にまとめたこと、さらには上海在住の日本人美術関係者が(長谷川三雄を含む)73名ほどいたことなどの事実も判明した。

そして、大橋毅彦の論文「戦争の世紀を生きた二人の“マドモアゼル・M”の物語・序説一室伏クララと村尾絢子の上海時代」(『早稲田文学(初夏号)』2018)には次のような記述がある。

「上海文学研究会は池田克己・小泉譲・黒木清次らが中国文学者も巻き込む形で発足させた文学団体で、その機関誌的役割を持つ『上海文学 春期作品』が創刊されたのは1943年4月だったが、そこに絢子は伊藤研之、田川憲^⑥、横田之子とともに、自身が得意とする女の〈顔〉のカットを提供している。」(pp. 244～245)

この記述から横田之子が上海在住日本人作家中心の文学誌『上海文学 春期作品』(1943)にカットを提供していたことが分かり、『上海文学 春期作品(復刻版)』(琥珀書房、2022)によりそのカットの図版が確認された(図2、図3参照)。

3. 横田之子の作品の図版発掘

『昭和期美術展覧会出品目録・戦前篇』(東京文化財研究所編、中央公論美術出版、2006)の記録によれば、横田之子は昭和時代に次の5回の美術展に6点の作品を出品していた。

1939(昭和14)年第26回二科会展出品:「閩北(上海)」「窓辺の花」

1940(昭和15)年第27回二科会展出品:「窓」

1941(昭和16)年第28回二科会展出品:「廢園の春(獅子林)」

1942(昭和17)年第29回二科会展出品:「楊樹浦」

1943(昭和18)年第30回二科会展出品:「窓」

5年連続して出品した6点の作品の画題から、2点は上海の街頭風景を、1点は蘇州の庭園風景をそれぞれ描いたもので、残りの3点の画題には地域の明記はなかったが、窓・窓辺をモチーフとしたものであることが分かる。彼女は長期的に上海に住んでいたため、残りの3点もおそらく上海の自宅とその周辺の風物を描いたもの



と推定できる。現在6点の作品とも原画の所在は不明である^⑧。

これから美術展出品の年代順に作品図版を示しながら、その関連情報を提供し解説を行う。

①画題：「閘北（上海）」



展示情報：1939（昭和14）年第26回二科美術展覧会出品

図版出典：絵はがきを撮影したモノクロ写真（横田東平氏提供）

図版サイズ：約13×8 cm

解説：閘北は上海共同租界の北部境界外の中華民国政府の管轄地域であった。1909年の鉄道駅建設により、閘北一帯が中国内陸と上海を結ぶ交通の要所となり、1920年代頃には、人口が急増し町が栄えていたが、1932年と1937年の2回の上海事変で町が大きな被害をこうむった。1939年刊行の『上海要覧（改訂・増補）』（杉村広蔵編）は閘北一帯について次のように記している。「従前は荒涼たる地であったが、上海の發達に伴ひ漸次繁榮を加へ、殊に住宅地としての發展著しく、邦人の此の方面に居住する者も多かつたが、今事變の戰禍により大部分は破壊された」（p. 38）。その後この地域は中国内陸から上海に流入した避難民が多く住むスラム街と化した。この絵はスラム街の一角をモチーフにしたものである。作品には崩壊を免れた一部の壁や門を再利用した建物が描かれている。壁に残された文字「官醬」は醤油、塩、味噌などを販売する「政府公認の調味料雑貨店」という意味の広告文で、正門真上の二文字「宝豫」は破壊される前の店の屋号であろう。この作品は閘北のスラム街の一角を通して、戦争の痛みと廃墟から立ち上がろうとする人々のたくましさ表現しようとしたものと見られる。

②画題：「窓辺の花」



展示情報：1939（昭和14）年第26回二科美術展覧会出品

図版出典：絵はがきを撮影したモノクロ写真（横田東平氏提供）

図版サイズ：約12×8.5 cm

解説：この作品には和風の丸窓とその手前に置かれたユリやアジサイの花が描かれている。モノクロの写真図版ではその内容や色彩などについて詳しく解説できないが、横田の上海自宅の一角を描いたものと思われる。

③画題：「窓」



展示情報：1940（昭和15）年第27回二科美術展覧会出品

図版出典：絵はがきを撮影したカラー写真（横田東平氏提供）

図版サイズ：約11.5×9 cm

解説：この作品には、上海自宅の室内風景が描かれている。玄関口のシューズキャビネットと和モダンの丸窓、小道具として身だしなみを確かめる卓上ミラー、おしゃれな婦人帽、一輪挿しのユリ、水色の香水瓶、そして可愛らしいお人形が描き加えられている。作品には若い女性画家の気品、生活感と独特な美的センスが感じ出される。この何気ない室内風景は当時上海の租界内で暮らす画家で歯科医夫人のプチブルジョア的な余裕のある暮らしぶりをのぞかせている。この作品の素材の一部は『上海文学 春期作品』（河肥荘平の短編小説「風は上がりぬ」）のカット（図2参照）にも活かされている。

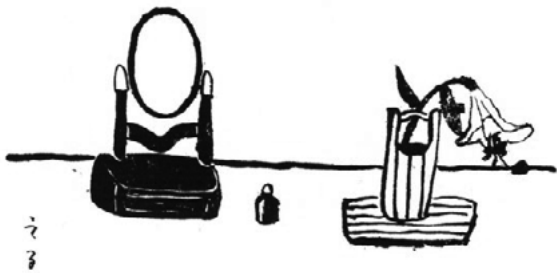


図2 『上海文学 春期作品』（1943 p. 110）

④画題：「廃園の春（獅子林）」



展示情報：1941（昭和16）年第28回二科美術展覧会出品

図版出典：絵はがきを撮影したカラー写真（横田東平氏提供）

図版サイズ：約14×8 cm

解説：庭園の高い外壁、屋根付きの回廊、薄汚れた白壁、そして淀んだ池の水草と咲き始める花などが描かれている。「獅子林」は、「拙政園」「留園」「滄浪亭」と並ぶ蘇州の「四大名園」の一つで、元代（1271～1368年）の十四世紀前半頃に禅寺の裏庭として造営されたもので、正式の名称は「獅子林菩提正宗寺」である。その

後の600年の間に園主の交代に伴い栄枯盛衰の歴史をたどったが、1918年からは蘇州出身の上海商人貝潤生（1870～1945年）^⑤の私家庭園となっていた。1937年11月から終戦までの間は一時期旧日本軍と汪兆銘政権の管轄下にあったが、その頃に中国江南地域にわたった日本の画家の多くはその名を慕って写生に訪れていた^⑥。横田もその時期に蘇州を訪れ、戦乱の中長年修繕されなかった「獅子林」を描き、廃園の姿からかつての名園の美しき面影を記録した。

⑤画題：「楊樹浦」



展示情報：1942（昭和17）年第29回二科美術展覧会出品

図版出典：POST CARD／郵便はがき／東京美術工藝會・神田

図版サイズ：13.8×7.7 cm

解説：楊樹浦は、上海共同租界東端（旧アメリカ租界）の黄浦江北岸沿い道路「楊樹浦路」とその周辺地域を指す。第二次世界大戦中に多くのユダヤ人がナチスによる迫害を逃れヨーロッパから上海に移り住んでいたが、楊樹浦一帯はその頃のユダヤ避難民の収容地域でもあった。楊樹浦の港に日本の汽船会社、倉庫会社や紡績工場などの施設が立ち並び、日本人集住の虹口区にも近接するため、多くの日本人もその辺に住んでいた。この絵にはその一帯の街頭風景が描かれている。古びた洋風の住宅地の一角、向かって右側には歩道に置かれた花屋の露店—サボテン、ユリ、カズラ、腰かけ、じょうろ、手作りの花籠などがリアルに描かれている。日よけ傘の破れた箇所、継当てから花屋さんの慎ましい暮らしぶりをのぞかせる。左側にはお店の看板ポスターが貼られ、そこにはシャツ、ネクタイ、装飾の小物などがきめ細かく描かれている。欧文で書かれた案内板の矢印は、道行く人に店の所在を知らせるものだが、同時に絵を見る人を画面のそとの世界へと誘い、多国籍の住民が雑居する租界地域への豊かな想像を促している。さらに画面の右側の花と左側のポスター、右に傾く日傘と左を指す矢印、露店が置かれたにぎやかな右画面に対してやや左寄りの3本の柱と左上の英文看板が画面構成における左右のバランスに一種の安定感をもたらしている。堅実な写実的手法、



女性画家ならではの繊細な観察力とやさしい眼差しがこの小さなカラー図版からも感じ取られる。この作品の素材の一部は『上海文学 春期作品』（月山雅の短編小説「支那街に育つ」）に提供したカット（図3参照）にも活かされている。

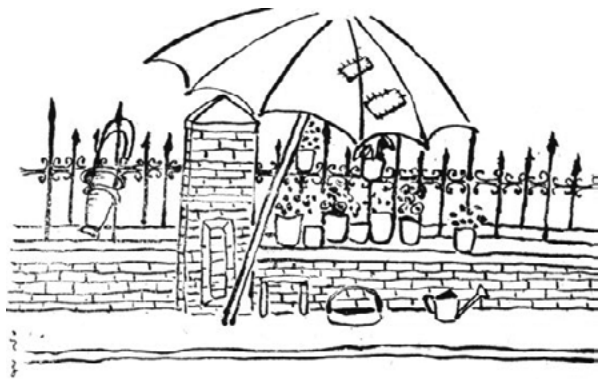
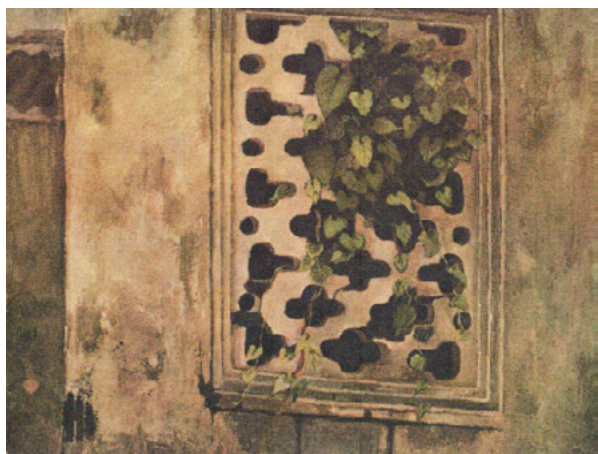


図3 『上海文学 春期作品』（1943 p. 102）

⑥画題：「窓」



展示情報：1943（昭和18）年第30回二科美術展覧会出品

図版出典：絵はがきを撮影したカラー写真（横田東平氏提供）

図版サイズ：約12×9 cm

解説：上海の路地で見つけた不思議な窓、中庭の壁にデザインされた通風口、穴から小動物が顔を出すように光を求める木の葉、古びた壁の汚れ、苔のにじみなどがカラー写真のようにリアルに描かれている。この作品には、道行く人が目もくれないところに生命の力と美を感じ取る画家のセンシティブな感受性と確かな表現力が示される。この作品は前掲の②「窓辺の花」、③「窓」と共に窓をモチーフとしたシリーズ作の一つとなる。

4. おわりに

横田之子の活動期間が短く、画展の出品作の原画も残っていないが、われわれは、限られた文献記録と作品図版を通して、彼女が上海生活で得られた美の感動をキャンバスに写し、日本国内画展への出品により近代日本美術の画題や画風の多様性に寄与していた事実の一端をかいま見ることができる。戦前の昭和期に上海風景を描いた作品が多く現れ、中には、鈴木三五郎（1902～1985年）の「黄浦江」（1940年）^⑤、野口弥太郎（1899～1976年）の「佛蘭西租界の眺」（1942年）^⑥、長谷川三雄（1900～1983年）の「上海バンド」（1943年）^⑦などのように、西洋建築が立ち並ぶモダン都市のシンボリックな風景を描くものが多かったが、それらの作品とは対照的に、横田之子は上海の町で暮らす人々の美的センスに敏感に反応し、日常生活の中の美の発見を楽しんでいたように感じられる。

三岸節子（1905～1999年）は『BBBB（3月号）』（冬芽書房、1950）掲載の文章「女流画家の歴史」の中で、戦前の日本は「純粋な芸術だけがものをいう国ではなく、背後の人工的な圧力がものをいう不可思議な国で」、「女流画家はいままで道もなければ、険しい崖や暗い谷間を彷徨うていた」（pp. 40～44）と語っていた。この文章から当時は女性画家にとって過酷な時代であった状況が見て取れる。戦時中、長谷川春子（1895～1967年）のように男性画家の活動に負けまいと自ら従軍画家に加わり戦争画を描いていた女流画家もいる中、時局に巻き込まれながらも、横田之子は冷静に周囲を観察し、温かい眼差しで異国の日常風景を眺め、戦争時代の「戦意高揚」に程遠い、上海の街角や蘇州で出会った美しい瞬間を記録していた。

〔謝辞：取材を快くお引き受けくださり、貴重な写真資料をご提供くださった横田東平・二葉ご夫妻、横須賀美術館保管画像をご提供くださった同館学芸員の沓沢耕作氏、そして図1の掲載許可を賜った著作権者の方によりお礼を申し上げます。〕

【注】

- ① 『昭和期美術展覧会出品目録・戦前篇』（東京文化財研究所 2006）に記載された村尾絢子（1915～1998年）の出品作は全部で13点あったが、画題と訪中の時期から推定される中国関連の作品は以下の7点である。
1939（昭和14）年第4回新制作派協会展出品作：「支那服をきる」
1941（昭和16）年第6回新制作派協会展出品作：「いえらしいやん」「開北の屋根」
1942（昭和17）年第7回新制作派協会展出品作：「窓邊」「りんさん」
1943（昭和18）年第8回新制作派協会展出品作：「姑娘」「赤い支那服」
7点の作品とも原画、図版は不明である。
- ② 『昭和期美術展覧会出品目録・戦前篇』に記載された伊藤研之（1907～1978年）の作品は全部で11点、そのうち画題から中国（上海）にかかわる作品と判断できるものは次の1点のみである。
1942（昭和17）年第29回二科会展出品：「開北」。

この作品の原画と図版は不明である。

- ③ 『昭和期美術展覧会出品目録・戦前篇』に記載された辻谷勝三（生没年不詳）の出品作は3点あったが、いずれも中国とのかかわりについて特定できない。
- ④ 複数の文献資料で見つかった長谷川三雄（1900～1983年）の昭和時代の出品作は以下の5点であるが、5点とも明らかに中国関連のものである。
1942（昭和17）年第12回独立美術協会展：「姑娘」「バンド（二）」
1943（昭和18）年第13回独立美術協会展：「上海風景」「上海バンド」
1944（昭和19）年第14回独立美術協会展：「上海風景」
5点のうち「姑娘」と「上海バンド」はモノクロ図版として残っている。『昭和期美術展覧会出品目録・戦前篇』の記載では1943年の2作の画家名は記載ミスで「長谷川三蔵」と表記されたので、ここでは『独立展集13』（朝日新聞1943）の記載に基づく。
- ⑤ 『昭和期美術展覧会出品目録・戦前篇』に記載された田川憲（1906～1967年）の出品作は14点あったが、そのうち画題から中国関連の作品と推定できるものは以下の3点である。
1942（昭和17）年第11回日本版画協会展：「上海」「弄巷夜景」

「江頭聞鶯」

3点の作品とも原画と図版は不明である。

- ⑥ 横須賀美術館提供の写真資料によれば、横田之子は1935年開催の第4回東光会展覧会に作品「静物」を出品していた。この情報から彼女は二科会の外に東光会にも出品していたことが明らかになる。横須賀美術館提供の写真資料には横田之子の作品写真「酒甕の家（蘇州）」があるが、制作年や出品情報が³ないため、今後継続調査が必要である。
- ⑦ ルーブル美術館ガラスのピラミッドを設計した建築家イオ・ミン・ペイ（貝聿銘1917～2019年）の父親である。
- ⑧ 拙文「従軍画家たちが描いた戦時中の蘇州―戦地記録画の図版データの記録」（神奈川大学『人文学研究所報』No. 60、2018）を参照されたい。
- ⑨ 『鈴木三五郎画集』（光風出版1966）に図版が掲載されている。
- ⑩ 『野口弥太郎画集』（美術工藝會1942）にモノクロ図版が掲載されている。
- ⑪ 『独立展集13』（朝日新聞社1943）に図版が掲載されている。